



ほととぎす いたくな鳴きそ 汝(な)が声を
五月(さつき)の玉にあへ貫くまでに

巻8-1465 藤原夫人(天武天皇夫人)

時鳥よ、そんなにひどく鳴かないでくれ。お前の声を五月の玉に交せて糸に通すことができるその日までは。

映画「小学校」を見て思うこと!

風薫る5月、馬見丘陵を吹き抜ける風が爽やかにほほを撫で、庭々の木々も新緑が増す好季節を迎えています。新年度が始まり、あっという間にひと月が経ち、子どもたちも新たな友達や先生方にも慣れてきて、学校・園生活に親しんでいる頃だと思います。子どもたちが楽しみにしていたゴールデンウィークも過ぎ去り、いよいよ学校・園では授業や保育、そして行事等が本格化する時期を迎えました。子どもたちが毎日ワクワクドキドキしながら楽しい日々を送ってくれることを願っています。



ところで、昨年の12月13日に封切りされた「小学校～それは小さな社会～」という映画をご存じでしょうか。ドキュメンタリー監督の山崎エマさんが作った映画で、現在、世界でとても話題となっている映画です。「世界が喝采!日本の小学校に驚いた!!」というこの映画を紹介するテロップがあったり、「私たちは、いつどうやって日本人になったのか、ありふれた公立小学校がくれる、新たな気付き」と「6歳児は世界のどこでも同じようだけれど、12歳になる頃には、日本の子どもは『日本人』になっている。」という紹介文があったりと、日本ではごく当たり前の学校生活に焦点を当てています。日本の小学校が普通に担っているそうじや給食の配膳、6年生を送り出す卒業式の準備などの特別活動を探り上げて、集団生活の中で子どもたちが日々成長していく姿をドキュメント映像としてコロナ禍の中、1年間、150日、4000時間を費やして作られたようです。

4月に入学したばかりの1年生は挙手のしかたや廊下の歩きかた、そうじや給食当番など、集団生活の一員としての規律と秩序について初めて学びます。そんな1年生の手助けをするのは6年生であり、子どもたちはわずか6年の間に自分が何者であるかという自覚を持つと同時に6年生としてふさわしい行動をとるようになります。また、コロナ禍で学校行事実施の有無に悩み、議論を重ねる先生たちの様子や社会生活のマナーを学ぶ1年生、経験を重ねて次章への準備を始める6年生の様子、そして3学期になると、もうすぐ2年生になる1年生が新入生のために音楽演奏をすることになった様子などが採り上げられています。



特に教育の先進国であり、自由と個人の尊重を大切にしているフィンランドでは、4カ月のロングランヒットを記録する話題作になっています。その理由は、教育の中で自由に過ぎたその反動が、自分のことしか考えない利己主義的な子どもを作っているのではという疑問が払拭できないと言うものです。日本の

子どもたちは、入学した時から、そうじの仕方や給食の配膳の仕方など集団生活を通して、一人一人の役割が与えられ、周りの人のことを自分のこととして思えるよう指導され、知らないうちに社会に通用する日本人として育っているというのです。だから、映画の紹介文にもあった「6歳児は世界のどこでも同じようだけれど、12歳になる頃には、日本の子どもは『日本人』になっている。」というフレーズが出てきたのだと思います。

監督の山崎エマさんが言っていました、「日本の小学校は、子どもの頃からみんなで何かに取り組み、役割や責任を与えることで、集団生活のなかで協調性を育みます。そして、社会に出たら誰でも集団(コミュニティ)の中で生きていくことになるわけで、日本は小さな頃から小学校を練習の場としてそれを実践している。良くも悪くも日本の教育の特徴ですが、海外から見ると新鮮で、取り入れたいと思われる要素がある。」と。

海外では、日本式教育の特別活動は「TOKKATSU」と呼ばれていて、NHKによると、インドネシアやマレーシア、モンゴル、エジプトなどで取り入れられているようです。

この映画で思ったことは、学校という小社会の、集団生活の中で一人一人が、自分のためだけでなく他の人のためにも、与えられた役割、あるいは自ら進んで取った役割を果たしながらの様々な活動は、知らず知らずのうちに日本人としてのアイデンティティを作っているのではないかと言うことです。それともう一つ思うことは、現在、それぞれの家庭で子どもたちは家族の一員としての役割が何か与えられているかという点です。私たちの子どもの頃は、玄関のそうじや食器洗い、風呂たき、買い物など何かしら家事の手伝いをやっていたように思います。今はほとんどの家事は自動化され、子どもとして、また家族の一員としての役割がなくなっていますが、何らかの形で新たな役割を与えてみることは家族としての帰属感を培うことにつながるのではないのでしょうか。



今月の一言

考えは言葉となり、言葉は行動となり、行動は習慣となり、習慣は人格となり、人格は運命となる

英国の元首相で強硬な性格から「鉄の女」と呼ばれた。(1925～2013)
マーガレット・サッチャー



自分の考えていることはやがて言葉として表れ、その言葉はやがて行動の軸になり、その行動は繰り返す中でやがて習慣になり、その習慣はいつか自分を形作る人格になり、人格はその人の選択の指標となり、運命を決めるものになるという内容の言葉です。

教育委員会の取組

新たに放課後子ども育成教室の4教室が民間に！

昨年の4月に真美ヶ丘第一小学校の放課後子ども育成教室〔学童クラブ〕（ひまわりクラブ）が広陵町の運営から民間事業者へ委託されました。今年度はさらに西小学校のあすなろクラブ・あすなろ第二クラブ、北小学校のくすのきクラブ、真美ヶ丘第二小学校のすぎのきクラブの4教室がこの4月から民間事業者へ委託となったことから、4月16日（水）の午後3時半ぐらいから山村町長とともに、くすのきクラブ、すぎのきクラブ、あすなろ第二クラブ、あすなろクラブの本館と新館の4つの学童クラブを順に訪問させていただきました。

8割以上の指導員の皆さんがこの4月からそれぞれのクラブに残っていただいたため、子どもたちにとってはこれまでと同様、元気いっぱい外遊びをしたり、おやつを食べたり、指導員さんに宿題を見てもらったりしていました。クラブ長や指導員の皆さんと、子どもたちの状況やクラブの運営についていろいろ聞かせてもらいましたが、ほとんど心配なく順調に運営されているとのことでした。



くすのきクラブの様子



すぎのきクラブの様子



あすなろ第二クラブの様子



あすなろクラブの様子

社会教育委員会議の皆さんが「広陵町の風景」を発刊！

これまで社会教育委員会議の皆さんが、「広陵町の民話」「ふるさとの言葉（広陵町の方言）」「広陵町の祭り」の冊子を作成され、広陵町の魅力を発信されてきました。

このたび、第4冊目となる「広陵町の風景」を文化協会写真部の皆さんから提供していただいた広陵町内のすばらしい魅力ある写真や社会教育委員さん自らが足を運んで撮影された写真で構成されています。

4月30日（水）にこの冊子の編集・作成に携わっていただいた社会教育委員さん5名と山村町長とともに、冊子の表紙を飾る百済寺に向いて記念写真を撮りながら、冊子作成への熱い想いを聞かせていただきました。



学校・園から

入園式・入学式の様子

北かぐやこども園

今年度は0歳児～5歳児クラスの全てに、入園児を迎えることができました。

新しいお友達47名が増え、今年度の北かぐやこども園は205名でスタートしました。たくさんお友達をつくって、楽しい経験をいっぱい積み重ねて欲しいと思います



真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園

4月11日の入園式はとても良い天気で、幼稚園にやってきているツバメ達も元気に飛び交い「入園おめでとう!!」とかわいい子どもたちを祝ってくれているようでした。担任の先生に名前を呼ばれると大きな声で「はい!!」と元気いっぱい返事をしたり、先生からのお楽しみ「幼稚園はどんなところ？」のコントを笑顔いっぱいに楽しんでくれたりしました!!

最後はプレ幼稚園の時から親しんできた「アンパンマンの体操」を新入園児さんや先生方、在園児たちとみんなで元気いっぱい踊りました。今日は園児たちをはじめ、先生方、来賓の皆さん、お父さんお母さんたちみんなが笑顔になる素敵な入園式となりました。



真美ヶ丘第二小学校附属幼稚園

3歳児14名、4歳児1名、計15名のお友だちが真美ヶ丘第二小学校附属幼稚園に入園しました。担任の先生からお名前を呼んでいただくと、元気いっぱいの声で「は～い!」と手を上げて答えてくれました。また、先生からの出し物のペーパークラフトを見てはうれしそうにお母さん方と顔を見合わせながら指をさし、お話をしている姿が微笑ましかったです。



広陵北小学校

広陵北小学校には49名の新一年生が入学しました。緊張した面持ちで入学式に臨んだ新入生も、上級生の温かい拍手に迎えられ、表情も和らぎました。担任の先生から名前を呼ばれると、元気な声でお返事できました。全校児童が集まった入学式は和やかな雰囲気の中で挙行されました。

